

識者 評論

安倍晋三首相は、第2次内閣発足からの連続在任日数が歴代最長になった。一方で目玉のアベノミクスは失速し、外交面の成果も乏しい。そのため、長期政権であっても、歴史に残る成果が見当たらないと言われることが多い。本当だろうか。

私は、安倍内閣が未来の日本に与える影響は思いのほか大きいと思う。将来、

連続在職首位

根柢に将来の圧力と同度



東京工業大学教授 中島岳志

なかじま・たけし 75年大阪府生まれ。専門は南アジア地域研究、近代思想史。近著に「石原慎太郎 作家はなぜ政治家になつたか」など。

言論統制が強まり、リベラルな価値観や言論空間が窒息する状況が生まれたとき、歴史家は、その重要な起点を安倍内閣期に求めるだろう。

安倍内閣で、権力が個人の内面に介入する法律が整ったことを見逃してはならない。2013年に成立した特定秘密保護法、17年に成立したいわゆる「共謀罪」法。これらが将来の日本で暴走する可能性を視野に入れないなら、秘密保護法は防衛、外交、スパイ活動、テロに関する事項を秘密指定できるとしているが、「秘密」とされる範囲が明確ではなく、恣意的な処罰への懸念が払拭されていない。

戦前・戦中の日本には、軍機保護法という性質の似た法律が存在した。この法律が引き起こした冤罪事件が「宮沢レイン事件」である。舞台は北海道帝国大学。1941年12月8日の日米開戦の夜、学生の宮沢弘幸氏と英語教師のレイン夫妻が逮捕された。宮沢氏が根室の海軍飛行場の存在をレイン夫妻に伝えたことが問題となったが、当時市販されていた根室の地図には飛行場の存在が明記され、秘密といえるような事項ではなかった。

この事件を詳述した本がある。「引き裂かれた青春—戦争と国家秘密」である。この本に、次のような極めて重要な証言が記されている。

「レイン夫妻が突然いなくなった後で、夫婦の世話になつていた北大生の一人が旅先から戻り、夫婦の消息を求めめぐねて、夫婦と一番親しくしていた本屋さんならと思ひ訪ね尋ねたら、いかにも迷惑そうに『わたしは、そんなに親しくしていませんよ』と突き放され、愕然とした」

宮沢レイン事件の本質は、この「本屋さん」の態度にこそある。書店主はレイン夫妻と親しくしていたことを追及されると、警察権力が自分にも及ぶのではないかと考え、口を閉じただ。

ここで起きたのが、国民の自主規制だ。国民は、見せしめ逮捕によって権力を制限するようになる。見えない権力が浸透すると、国家が設定している基準以上に、国民が勝手に自主規制するようになる。隣組のような具体的な相互監視システムが起動し始め、同調圧力が強化される。これが権力にとって、最も効果的で効果的に国民を服従させる方法である。

フランスの哲学者ミシェル・フーコーが論じたように、国民の側に監視されているという意識を植え付けることによってこそ、監視権力は最大化する。権力のまなざしの内面化こそが、自由な言論を圧迫する。

安倍内閣の最大のキーワードは「付度」。森友学園問題を巡っては、官僚の付度が話題になった。記者クラブを中心としたメディアの付度も問題視されている。コロナ禍においては、自粛警察という同調圧力が社会現象として加速している。

安倍内閣がこの国に刻んだ傷は大きい。この傷を丁寧に治癒しなければ、大きな根柢を残すことになるだろう。

中島岳志さんが、上記のように花伝社刊『引き裂かれた青春—戦争と国家秘密』を紹介して、証言を引用しています。一般紙で書名と内容が紹介されたのは初めてだと思います。

本書刊行時、北海道大学准教授だった中島さんに、本書を贈呈しました。(福島 清)